

Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ18 まえがき
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2021, 18, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/91429">https://hdl.handle.net/11094/91429</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## まえがき

本書は大阪大学歴史教育研究会の活動報告書の第18冊である。

大阪大学歴史教育研究会は、歴史学と歴史教育をめぐる「高大連携」を推し進めるための恒常的な討議・協働の場として設立された。毎月1度の例会は、2005年の設立以来2021年の3月で133回を数えるまでになった。この間多くの大学教員、研究者、大学院生、高校教員がこの会に関わり、発表や討論を重ねてきたことで、会の活動は年を追うごとに充実したものとなっている。

今年度は新型コロナウイルス感染症の全世界的な流行という未曾有の事態が発生し、本研究会の開催形態も、ZOOMを利用した完全オンライン開催へと移行せざるを得なくなった。対面での議論が不可能になるという大きなデメリットが発生する一方で、オンライン化により全国から報告者・コメンテーター・参加者を迎えることが可能となった。これにより、今年度も各分野の最新の研究動向や成果の紹介を揃え、活発な議論を交わすことができたのである。

月例会以外の場合でも、2015年7月に発足した高大連携歴史教育研究会の第6回大会は7月に大阪大学を主管校として開催され、そこでは多くの本研究会関係者が報告者・コメンテーター・スタッフとして関わった。他に堺市博物館をはじめとする外部組織と連携した活動を活発に展開した。それらに関する詳細は、巻末の活動記録を参照されたい。

さらに、今年度も大阪大学の歴史系の学生を中心とする大学院生によるグループ報告を行った。今年度の課題は「病の歴史」に設定したが、課題設定の前提になるのは、もちろん新型コロナウイルス感染症の流行である。

この未知のウイルスは全世界の国家や社会に大きな混乱をもたらし、我々のこれまでの生活を一変させた。このような事態が生じたことで、歴史の中で病が果たした役割に改めて大きな注目が集まったのである。それは、今年度に発表された以下のような特集や書籍に、歴史学の内外から大きな注目が集まったことから明らかである。

『史林』（103巻1号）2020年1月「特集「病」」

秋田茂・脇村孝平(編)『人口と健康の世界史』（世界史叢書8、ミネルヴァ書房、2020年）

『現代思想』（48巻7号）2020年5月特集「感染／パンデミック」

この課題に対し、学生グループはコロナ禍において困難を抱える様々な「社会的弱者」がクローズアップされたことに着目し、「近代医療からみる、病における社会的弱者—コロナパンデミックと関連して—」と題する報告を行った。学生はまず半年間に渡る準備の上で、

12月に開催された第131回例会でグループ報告を行い、次にそれをもとにしたレポートを共同執筆した。本報告書にはこの成果となるレポートを掲載しているのので、ぜひご一読を賜りたい。今年度のレポートが、病が歴史に果たした役割を多面的に考察する教材づくりのたたき台として、全国の教員に参照されるものとなれば幸いである。

さらに、本報告書には月例会での院生報告以外の報告資料を複数収録している。

今年度は月例会においても、「病」に関連する報告を集中して採り上げた。7月に開催した第129回例会では、加藤茂孝氏と戸部健氏にそれぞれウイルス学と中国近代史の観点からご報告いただいた。さらに、12月に開催された第131回例会では、脇村孝平氏に基調講演として前掲書『人口と健康の世界史』に関する報告を頂戴した。以上3点の報告資料を3人の先生のご厚意により収録しているのので、ぜひご参照を賜りたい。

さらに、第133回例会では小林傳司氏と桃木至朗により、コロナ禍のなかで歴史学と歴史教育の意義を問い直す共同報告を行った。このうち桃木の報告資料を収録しているのので、あわせてご参照を賜れば幸いである。

最後に、2020年度の活動にあたり参加・協力して下さった研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、あつくお礼を申し上げるとともに、目下の新型コロナウイルス感染症による混乱が早期に終結し、教育現場も平常に戻ることを祈るしだいである。

2021年3月 桃木至朗